

防災放送 聞きやすく

白山 先端大教授システム発表

災害時、防災放送がうまく伝わるにはどうすればいいかを考える研究会が五日、石川県白山市の金沢工業大地域防災環境科学研究所であった。音声信号処理に詳しい北陸先端科学技術大学院大（同県能美市）の赤木正人教授（六〇）は、放送機器が騒音の中でも聞き取りやすい音を流すシステムの研究を発表した。

赤木教授は「災害発生時、複数の放送音声を重ねたり家屋倒壊などの騒音が発生したりして、放送内容が正確に住民に届くとは限らない」とし、機器に人間がもつ「ロンバード効果」を活用することを提案。

研究成果を発表する赤木正人教授。石川県白山市で



ロンバード効果は人が騒音の中で話するとき、無意識のうちに関心の聞き取りやすい声を出していることを指す。防災放送も現場の音環境を読み取り、避難する住民に聞き取りやすいように発信することが重要だとし、赤木教授は「非常時こそ適切な避難誘導が大事。将来的に地下鉄構内など多くの場所での活用を目指す」と意欲を示した。

北陸中日新聞
(平成28年11月6日)

研究会は日本音響学会北陸支部が主催。赤木教授のほか、音響機器メーカー「TOA」の凍田裕一さんと松石遼太さん、東北電気通信研究所の崔正烈助教、金沢工業大の土田義郎教授が研究内容を発表。参加者約四十人が真剣な表情で耳を傾けた。

(富田章午)